

関西学院大学 研究成果報告

2020年3月17日

関西学院 院長殿

所属：教育学部
職名：教授
氏名：山本健治

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：オーストラリア） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	日本とオーストラリアのスクールカウンセリング事情に関する比較研究
研究実施場所	南オーストラリア大学及びフリンダース大学等他大学及び各州立図書館
研究期間	2019年 9月 2日 ～ 2020年 3月 10日（ 6ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

今回の研究の拠点となる南オーストラリア大学（University of South Australia:以下、UniSAと記す。）に到着後、大学の事務方より大学及びアデレードでの生活面全般についてアドバイスを受けた。その後、教育学部・心理学部・社会学部があるMagillキャンパスに移動し、用意していただいた研究室を利用して研究をスタートした。

9月初旬、今回の私の学院留学を引き受けてくださることになった一人であるAnthonyElliott教授（社会学）と他のメンバーを含め今後の私の研究方針及び研究方法等について話し合った。

研究は、オーストラリアのスクールカウンセリング事情に関する先行研究の収集及び講読から始めた。とりわけ不登校といじめの2点に絞って研究を始めたが、不登校に関する文献が極めて少なく、聞き取り調査の結果、日本では大きな教育問題となっている不登校はオーストラリアではさほど喫緊の課題と捉えていないことが判明したので、研究課題をいじめに関することに絞ることにした。

オーストラリアのいじめ研究の第一人者としては、UniSAのKen Rigby教授が有名であり、まずは彼の著作や論文を読みはじめ、そしてその中で生じてきた疑問を直接本人に伝え情報交換したいと考えた。ところが彼はすでに大学を退職していたため、大学を通して連絡をとりご自宅への訪問の機会を得ることができた。そこで私からの疑問に答えをいただき、多くの示唆を得ることができた。また、彼は次にアデレード大学の日本人

教授である米山尚子氏を紹介してくれた。10月下旬、アデレード大学を訪問し、米山教授とオーストラリアと日本における学校でのいじめについて情報交換を行った。

続いて出会った研究者はUniSA教育学部のBarbara Spears教授である。彼女は前述のKen Rigby教授や米山教授と「オーストラリアの学校におけるいじめ」について共同研究をした一人である。彼女からオーストラリア連邦政府のいじめに関する方針等についてリーフレットをもとに説明を受けた。そもそもオーストラリアという国は6つの州と2つの準州で構成されている国であるが、このいじめ問題に関しては全国統一の方針を掲げており、その内容も充実したものである。ここで、少しこの内容にも触れておきたい。

「Australian Student Wellbeing Framework」というものがそれで、「オーストラリアの生徒の幸福に関する枠組み（基本構想）」と訳することができる。このタイトルからもわかるように、特にいじめに特化した構想ではなく、より広く子ども達の幸福についてめざす方向を示している。そして①Leadership②Inclusion③Student voice④Partnership⑤Supportと5つの項目に分けて方針を具体的に示している。①Leadershipでは校長や学校のリーダーがとるべき役割を明確にしている。②Inclusionでは学校コミュニティのすべてのメンバーが友好的な学校文化の構築に向けて取り組む姿勢を示しており、また③Student voiceでは生徒自身が自分の学習と幸福を確保するためには自身が声を発することが重要であり、またそのことを実現させるための双方向性の学習環境を整備することの重要性を謳っている。④Partnershipではコミュニティが学校のパートナーとして生徒の安全、学習、福祉に貢献する必要性が明記されており、⑤Supportではこれまでの述べてきたすべての人間の積極的な行動の促進と認識が最も重要であると述べている。以上のことから、オーストラリアでは子ども達を取り巻くいじめ対策をまさに学校と社会が一体となって進めていくべきことがらと捉え、その姿勢を具体的に示す指標が存在しているということが理解できた。

次に研究テーマをより具体的な「いじめ対策」に照準を当てることにした。ここでは日本のいじめ対策にも大きな影響を及ぼしたフリンダース大学のPhillip T.Slee教授を訪問することから始めた。彼もKen Rigby教授と共同研究を行っていた研究者の一人で日本を何度も訪れ講演を行っているいじめ研究の権威者である。彼は「P.E.A.E.C Pack」といういじめ防止プログラムを開発している。日本でもこのプログラムを参考にしたピースメソッドというプログラムを取り入れて実践している学校もある。彼の「P.E.A.E.C Pack」では8つのレッスンが設定されておりその連続した活用がとても重要であり、そのことを通じていじめに対する教員の洞察力が高まり、またいじめに対する姿勢が子ども達にも十分伝わると述べている。今後この源流とも言える「P.E.A.E.C Pack」と日本のピースメソッドを比較研究して、より日本の学校教育で活用できる効果的な方法を模索したい。

いじめ研究に際し、これまで大学教員との情報交換を進めてきたが、より学校現場に近い州政府教育省の方との面談を希望したところ実現に至った。2月24日、南オーストラリア州政府教育省にてTrinh Mai氏（Assistant Director）及び州の学校関係者と情報交換を行う機会をもった。そこでは、オーストラリアと日本における学校でのいじめの実情とその対応の在り方について熱心に協議することができ、新たな示唆を得ることができた。そして今後も引き続き情報交換をし合うという約束を取り付けることができた。

以上、留学先の南オーストラリア大学のあるアデレードを拠点として研究を進めてきたが、留学の後半では、ニューサウスウェルズ州マッコリー大学Mio Brice教授、クイーンズランド州クイーンズランド工科大学のMaryilin Campbell教授とも交流を図る機会がもて、オーストラリアのスクールカウンセリング事情について情報交換を行うことができた。また、シドニー大学、メルボルン大学、RMIT大学、西オーストラリア大学の各図書館やニューサウスウェルズ、クイーンズランド、ビクトリア、西オーストラリアの各州立図書館を訪れ、いじめ及びオーストラリアの人権問題に関する資料を収集することを通して研究の一助とした。

最後に、今回このような研究の機会を与えてくださり、また物心共に支援をくださった学院と教育学部に厚くお礼申し上げたい。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。